****

市町村自殺対策アドバイザー派遣事業　関係者検討会について

【参加者】

〇講師・アドバイザー：自殺予防総合対策センター自殺予防対策支援研究室長　川野健治先生

〇候補市町村の担当者：古殿町・白河市・南相馬市

H27.1月に全市町村に意向調査を行い、自殺対策アドバイザー派遣事業利用に対し、希望または希望を検討中と回答した市町村の中からアドバイザー・県障がい福祉課・精神保健福祉センターの3者で検討し、当事業利用の候補として選定した。

〇管轄の保健福祉事務所（県中保健福祉事務所・県南保健福祉事務所・相双保健福祉事務所）、精神保健福祉センター、県障がい福祉課の担当者。

【プログラム】

1. ミニレクチャー（川野先生）　「市町村における自殺対策の進め方」
2. 各市町村からの問題提起と討議
3. 講義のポイント】

A　４つのプロセスを確認しながら自殺対策を進めましょう

* 1. サーベイランス（自殺の実態把握）　②危険因子の特定　③予防・介入　④評価

例：香港では木炭による自殺（一酸化炭素中毒）が多いことが分かり、入手を制限する対策を行ったところ自殺が減少した。

例：松之山町（新潟県）では高齢者のうつ病による自殺が多いことが分かり、グループによる心理教育とグループ活動の介入を行ったところ自殺が予防された

B　評価を行いながら対策を立案・実行しましょう

〇評価には次の2種類がある

　・アウトカム評価（自殺率のほか自殺念慮者数、ハイリスク者同定率、ケアを求める人の数など）

　・プロセス指標（研修受講者数、相談介入数、相談者の満足度、配布物の普及率など）

〇有効な評価の例

　・ボルチモアでは相談電話の有効性を示すために、相談者にメンタルヘルスの問題のスクリーニング（点数化）を行い、具体的に何人の危機にある人への介入を行うことができたかを算定した

1. 討議のポイント】

A　自殺の実態評価について

　実態評価は統計を見ることだけではありません。普段の保健業務の中で気が付いたこと、あるいは自殺者の個別情報で気が付いたことなど、定量化できないような内容も大切です。普段から、そうした「ちょっと気になる」ということを言葉にするように心がけましょう。そして、そうやって気づいたことがあったときに、あらためて関連しそうな指標を探るというように、「統計で確かめる⇔気づく」の行き来を忘れないようにしましょう。

（例：「ストレスを感じている人が多い気がする」→「ストレスに関係する統計情報は？」）

B　自殺対策について

なにか自殺対策プログラムを実施するときに、そのプログラムがどのような意味を持っているかを考えて、その意味を生かすように工夫して実施しましょう。たとえば、一つのプログラムによって、どのような人の自殺をどのくらい防ごうとしているのか、具体的な数を想定しながら考えます。

例：相談電話を設置

そこにどのくらいリスクの高い人が電話してくるのか（簡単なスクリーニングを実施してみる）、あるいは、どういう普及啓発活動を行ったことによって相談電話が増加したのか（何を見て電話したのか尋ねる）といった評価をする、などの工夫を考えましょう。

例：ゲートキーパーを養成

　養成したゲートキーパーをどのように自殺対策に役立ってもらうか考え、それに応じた評価を考えましょう（ゲートキーパーとしてリスクがあると判断して相談を勧めた件数、リスクのある人への見守り支援に携わっているゲートキーパー数など）

☆☆☆　検討会の評価　☆☆☆

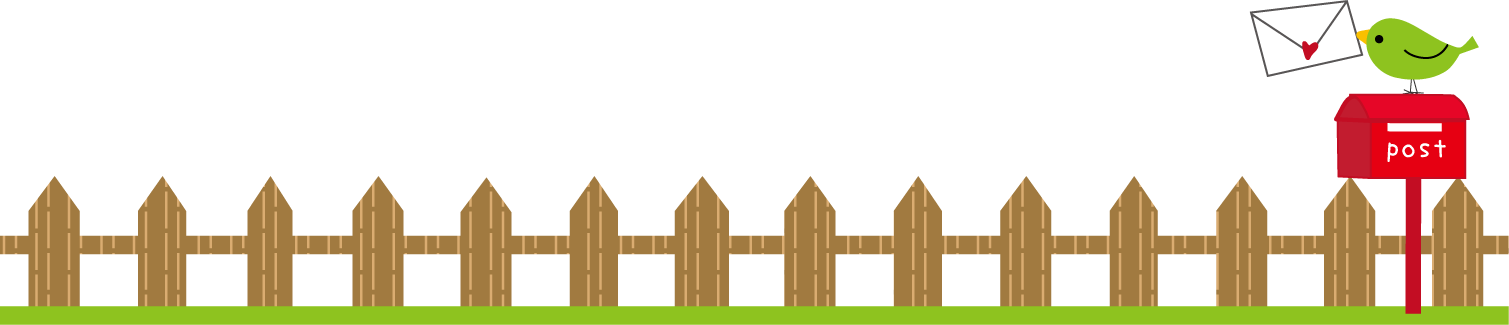
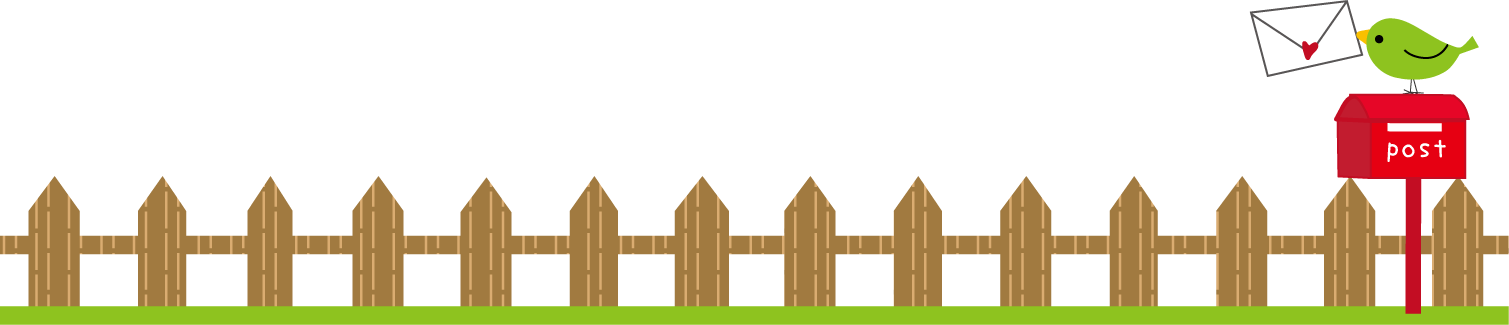
・各対策の意義を考えながら実施することが大切なことが分かった。

・今回の検討会の準備を事前に行う中で、対策について考えを整理することができた。

今回対象とならなかった市町村の皆さんも、是非参考にして自殺対策に取り組んでいただけ

ればと思います。また、今回の記録をご覧いただいて、新たに課題を発見したという方もいる

かもしれません。アドバイザーの派遣は上記の3市町村（古殿町・白河市・南相馬市）で検討

****していくことになりますが、この情報交換メールでもできるかぎりご相談に応じますので、

遠慮なくご相談ください。